

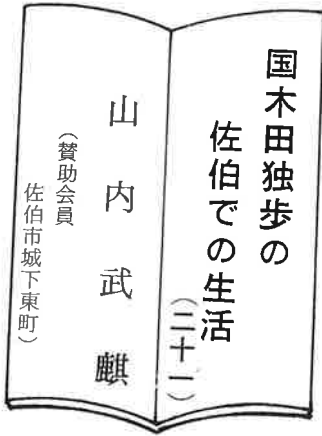
この辺はまことに辺鄙な村である。それでも人は住み花は咲いて、そこにも人生がある。老若男女がいる。そこに吾があるのである。そして、その感懐を次のように記してある。

知りぬ、己れの吾を以て尤も大なる吾と心得、其の吾をのみ中心として齷齪することの極めて愚なることを。見よや、乾坤の間、人類至る処に生滅す。何れか其吾を保たざらん。希くは此の吾をして其等凡ての吾に住まはしめよ。

と、自分の吾のみ考えて、他の吾を考えなかつた愚を反省している。

そして

余は此の
凡ての吾に
同化するを
得て天地悠
々の哀感の
うちに、神
聖者の信仰
に生き、以



て他の吾達の為めに美妙を発揮し得る文士となりて一生を送るが願のみ。

と、美妙を発揮して他の吾の為めに尽くす文士となることとが、自分の望みであると述べている。

英気をふるって縦横に美妙を発揮し得たらどれくらい幸せであろうか。

その美妙は何処にあるか。

その美妙はシェクスピアの筆の上にある。ユーゴーの筆、ウォーズワースの筆の上にある。また、老子信仰の人生観、クリスト信仰の人生観にある。そしてまた李白の詩の声に、シヨウペンハウエルの哲理のうちにある。美妙は至るところにある。大我同情の眼で見れば至るところにある。人の性質の暗いころも描くと美となる。社会の暗黒も写せば美となる。自然の美は勿論美である。

と、美妙を求めている。

昨日老桜と別れて帰途につき、一二丁来たところで、路傍に古びた墓が四つ五つ並んで草の中に立っていた。自分はみんなにこの墓とあの老桜とどちらが年を経ているだろうかと問うた。みんなは勿論老桜であろうと答え

た。そうであろう。しかし墓もその形といい、その朽ちてかかっている様子から見ると近頃のものではない。一首の歌を得た。

桜花なれこそしらめ此の墓に

眠りし人の花のかんばせ

黒沢に行く道はいつも溪流に沿うて進む。この流れが曲折するにつれて道はその岸に沿って曲ったり、横ぎったりする。両側の山脈から分派した山の尾にたち切られて村落があちこちに散在している。山桜はいたるところの谷にある。鶯があちこちで鳴いている。農夫は畑に出ている。若葉が萌え出て陽気は空一ぱいである。

鶯の啼なる方をふりさけば

木の間がくれに花の散るなり

桜花名もなき山に咲き出でて

ゆかしさまさる鶯の声

茅の屋をみごしの山の花さきて

春日のどかに翁眠れり

俗調一つ

春の日に独りぶらぶら山家を問へば

野辺の花まで仰へ顔

と、堅田道の風情を描写し、浮んだ歌を記してある。この黒沢遠足の記は富永日記にも、尾間日記（尾間明の日記）にも記してある。

この遠足の同行者は、国木田兄弟・富永・飯沼・並河・田中・山口・尾間の八人である。

富永日記を見ると、昨日の約束で九時に教会に集合し十時半に黒沢へ向って出発した。道すがら話したり休んだりしてゆっくり歩いて午後三時半に黒沢に着いた。

面白かったのは友達同志の話が各々その性格を表わすことであった。詩人的で哲学者風に山川草木の美を称えるのは国木田師である。またこの岩はこうして出来たもので、これは幾年かしたら落ちるであろうと説明するのは飯沼君である。

谷を渡って見渡すとおそかった、桜の花は殆んど無く紅褐色の葉が出ている。しかし覚悟の上であったので失望せず、東光庵に入って足を洗って縁に腰を下して落ちる花を眺めた。

国木田先生は十六銭出して菓子を買ひ、みんなに食べさせた。みんな菓子を食べながら五日並べをしたり、歌を作ったりした。

四時に帰途につき、七時に帰宅した。
と、ある。

なお、この黒沢の桜について、佐藤鶴谷の「佐伯志」には「桐原の桜樹」と題して次のように記してある。

青山村大字黒沢桐原きりばらにあり。二株の老桜樹、一は幹の太さ一丈八尺、一は一丈二尺にして其高さ共に七八丈あり。枝條繁茂して垂天の雲の如く、春風花発らくの候（毎歳四月中旬を以て満開の時期とす）は夜色皎々として十数町外、月夜の觀を為すに至ると。樹下に一小庵あり。風致甚だ佳なり。

と、ある。この桜は大正三年に颱風で倒れたがその後新たに芽が出て昔の面影を呈している。

二日

人の精神は願望と信仰とによりて活動す。

と、人の精神の働きについて書いてある。

願望と信仰はその学力と智力と感情とによって定まる。希望と信仰は行為を決定する。行為の成功不成功は、その精神を働かせる意志の剛毅の如何によってきまる。そしてその成功不成功に満足し或は不満足で、心の平靜と

不平とを感じるのはその人の智と情とに關係する。われわれの外部には色々な事情があり、影響を及ぼす。しかし結局吾は吾の在り方によって決定する。
と、ある。

三日の記には

じつと瞑想して「時間」の進んで行く有様を考えると一種の戦慄を覚える。歴史を読んだときの感じと同じである。この感じて実際の人間社会の生活の実態を考えると、更らに奇異を感じる。この實際生活には現在があるのみで、今日があるだけである。春の日に春を認め、夏の日夏を認め、秋冬が来て秋冬を感じるのみである。こゝには宗教家や哲学者・詩人達の「吾」とは全く異なる「吾」が生活している。自分はこの二種の「吾」を感じ色々と考えると一種言うことの出来ないような奇異を感じるのである。

と、現実の世の中を見つめ考えている。

四日の記には

いざわれ浮世の吾の心をも描きてみん

と、書き出して、浮世の一般の人々と哲人・聖人の心とを比較して書いてある。

自分はまだ哲人が感想することを深く感じとることは出来ないが、明らかに言えば、今までの自分は理想のみ追求する自分であった。心を躍らせていた。今もそうである。しかし理想の世界に住む人達の外に、浮世に住む人が多いのは事実である。自分も浮世心を感じないではいられない。そのありのまゝを描いてみよう。

哲人の心とこの自然の心とが幽玄美妙な調和を保っているように、浮世に住んで「現在」を「永久」に感じる人々の生活の有様もまたこの天地と一種の妙な調和をしているのも不思議である。

靈魂不死を感じる心とこの無窮の天地とがまことに美妙な調和をしているように、若い夫婦や恋人達が、春日のどかに手をとって歩く様も、また確かにこの美妙無限の天地の心と一種の調和をしているように見える。

一時を感じる時には時に勝つ信仰が必要であるが、時を感じない通俗な生活をしている人々にはその必要がなくして、自分から「永久」の中に住んでいるのも不思議である。

この二つの心を深く考えねばならない。

自分はクリスト・ウオーズウオース・カーライル・テニソンの心を信じてその信仰を羨むと同時に、無罪で山間に朽ちる農夫の心も尊く感じ、その心を羨む。

昨日、徳富氏に収二と連名で金五百円の借金を依頼した。

昨夜、「夕暮」を作りかけて今朝終る。

あゝ「浮世の波」朋友の一生を思うと、一種の悲哀を感じる。引頭はどうか、富永は、高橋平吉は、石崎ためは、あゝ浮世の波、しかし、人の性は美妙である。彼らは彼らの一生を楽しく暮すであらう。

「夕暮」のあとの四月十三日の記事にも「夕暮」を改作し了はるとあるが、この題名の作品は残っていない。

「浮世の波」アドルフ・ステルン原作、森鷗外の翻訳小説。

昨夕、収二と一しよに招魂場に散歩して行った。桜花の美しさを感じた。

そして、一しよに来るべき今年の夏休みの楽しさを語った。楽しい。待つことは楽しいことだ。待つ楽しみを

するの何の遠慮があろう。あの乙女が待っているであらう。あの乙女に遇うのを待っている。楽しく待っている。清い心で待っている。自然な心で待っている。

待つことの楽しさをするのに何も遠慮することはない。これは「現在」の「清き心」「美妙の感」を受ける権利である。

そして次に

吾思へらく、吾彼乙女と今より婚を約す可きか。吾は大いなる義務を有す。世と戦はざる可からず。彼女を此の戦争の苦難に引き納るに忍ぶべきか。

と、彼の乙女と婚約すべきかどうかと迷っている。

自分の一身の計はまだ定まっていない。言い換えると恆産がない。恆産がなくて婚約すれば一種の束縛を形作るのではあるまいか。

しかし、自分は彼女を恋している。

恋を冷然と押えるのが果して強い心か、自然の心か。

自分は果して彼女を恋してよいのか。

自分は真に人生を戦争と信じるか。

人生は平和である。剛毅であり、満足であり、幸福であり、無罪であり、職分である。見よ農夫を。見よ哲人

を。

それなら結婚すべきか、いやいや、寧ろ結婚の約束をする。そして一二年後に結婚しよう。

恋は剛毅の敵か。

迷って決しきれない。

悠々とした心を持つべきだ。結婚したければ結婚せよ。恋が人情であれば恋して何であらう。意気は自然に出来る。

そして最後に、

恋によりて吾人情の幽音妙調をきくを得ば恋ひんのみ。

と、記してある。

しかし、また、

されど反省せよ、爾の恋は健全にして清潔なる恋か堂々として立つ丈夫の恋か。哲人の恋か。爾よく反省せよ。

と、反省している。

この彼の乙女とは誰かよく解らない。

自分の願いは美文で高尚な人物を描きたいことである。

人情自然の極処を貫くことの出来る最も美妙な方法で最も高尚な人の性格を描くことである。最も偉大な人物を描きたいことである。

と、自分の願望を述べ、

何故に吾は大詩人たる能はざるか。

何故に吾は大美術家たる能はざるか。

然り何故に。

嗚呼此の吾。此の吾。何故に為すなき生涯を送らねばならぬか。

嗚呼何故に。

と、自分の足らざるを慨いている。

五日の記

何故に自分が大詩人となることが出来ないのかと問うたのは、決して虚栄心から出たのではない。よくよく考えて出たものである。

まことに不思議である。何故自分が大詩人・大美術家になることが出来ないのか、と問うてくると、不思議な思いがする。

セクスピア・ミルトン・ゲーテ・カーライル・ウオ

ーズウォースのような、或は支那でいうなら杜子春のような人達は、悉くこの天地と人情とに感応した人ではないか。

その「吾」は一つである。

「詩」がたゞ一人の小我の特別な産物であれば、出来ないことが出来たのである。しかし、大我心の発動であったなら、その大我に入ることの出来るものなら誰でも詩人となることが出来るのである。

詩人になれなくてもよい。しかし、詩人になれないことは大いに悲しい。何故なら自分が小我の人間であるからである。自分の品性の卑さをあらわすからである。真人たる資格に欠けているからである。

と、詩人になることを願望し、

嗚呼 美妙ノ 余は爾の宗教を信ずる也。ア、人情余は爾の声を信ずる也。

美妙ノ 余は爾の健全自由なる宗教を信ずる也。

爾は凡ての「吾」の生命たる可し。

と、美妙を強く求めている。

次に

「Heroic」自分はこの文字の訳を知らない。

この語の意味は大きい。人間の性格の中で最も大きいものの一つであるに違いない。

健全な思想と、剛毅な精神と、直截で真摯な感情とでなければ、決してこの性質はない。

この性質を慕う。美しいこの性質。大人物はこれを見小さな村の中にこれを見る。その美しさに変りない。

「うきよの波」の主人公エエリヒのような人はこの語に適當している。この小説が一種何とも言えない美妙の感を与えるわけは全くこの性質にある。

嗚呼 Heroic 美妙なる性質よ。吾爾を慕ふ。

と、Heroic な性質にあこがれている。

この語の意味は英雄らしさと訳すべきであろう。

この宇宙に美しいものがあるか。もしあるなら人間の品性の美しい程美しいものはない。花は美しい。自然は美しい。しかし人間からすれば、人間の品性の美しさより美しいものはない。

あゝ 美しい品性。どんな大きな詩も歌も実に美しい品性の呼吸・活動・生命を再現させるより外にはない。

人から人に及ぼす感化は、その雄弁よりも主義よりも信仰よりも学識よりも、実にこの品性の力が最も深く強

い。

美なる品性は「吾」の神聖なる精髓なり。之れなくんば凡ての「吾」は只だ地につける朽つべきもの也。

品性とは靈魂の衣服なり。

と美なる品性を称えている。

つくづくと人々の行為や挙動を傍観すると、意志の薄弱なほど下劣な品性はない。しかも薄弱は人生特有の欠点であることは痛憤の至りである。そして

嗚呼薄弱よ。爾は大なる人より小なる人に至るまで一挙一動に其力を逞すること悪むべき哉。

と、意志薄弱なことをけなし、

それなら美しい品性は何かと考えて、

美しき品性の中の尤も美しい品性の一は剛毅なること也。

と、剛毅なることを挙げてある。

自分の朋友・生徒・或るは読書の中の人物で、意志薄弱はその人の天才を殺し、信仰を殺し、勇氣希望を殺しそして成功を殺している。

嗚呼健剛真面目の人何処にある。

と、人の美しい品性を求めている。

あゝ自分は生れてこゝにある。この命には限りがある。終りの知れた年齢を経過してもう二十二年八ヶ月。もう決して壮年でないと云われない。静かに反省してみても果してどうか。

嗚呼此の吾。自から点検し来りて果して如何。

学問は人を教えるに充分か。品性は世を感化し得るか信仰は果して俯仰して恥じるところはないか。勉強は天職を遂行するに充分か。

と、自己反省をして

のんびりとしていて地上での生命は日々経過していくそして愚であることに變りない。意志が薄弱であることも變りない。品性が高尚でないことも變りない。

自分は深くこの生命を考えると同時に、一生の運命を考へる時は心がおのゝくのを覚える。

と、自己自身を強く省みて

されど吾は神の愛を疑はず、真理善徳・美妙を信ず感ず。務めて怠らざれば何れの日か人たる人たらんのみ。

と、神の愛にすがり、大いに努めようと期している。

生命それ自から感ずる心を転じて、直ちに此永遠

無窮なる自然を思ふ。靈魂不朽を信ぜざらんと欲するも能はず。

と、高遠な理想信仰を考えているが、こんな感想から離れて通俗人の「吾」のことを考へる実に奇異な感がする。

これらの「吾」の意味は何か。

われらは、クライストの吾、ミルトンの吾、ウォーズワースの吾、その他カーライル・エメルソンの吾を考へる時は崇敬・壯嚴・偉大の感に充される。

それに通俗の人々を見ると、悲哀を感じ、同情の念が湧き起ってくる。

自分は彼の哲人達に伍して行けなかつたら痛恨である。しかし、このまま朽ちてしまふのならあの憐れな同胞たちと一しょに朽ちたいものである。

悪と罪はにくむべし。されど凡ての「吾」は吾をして同情の涙の外あらざらしむ。

嗚呼此の吾ノ

と、「吾」を考へて、通俗の同胞たちに深い同情を示している。

六日

人は毎日の生活で、体や心に倦怠を感じる事が度々ある。この時が一番危険である。

この時にこれを救うものは実に美妙である。殊に音楽のようなものである。心血はこれで清く洗われ、鼓舞され、魂がよみがえる。

美術は実に人を健全ならしむ。

と、倦怠を救うものは美妙であると述べて以下その美妙について記してある。

美妙を發揮する。これ吾が心から満足して務めんことを希ふこと也。

と、美妙を發揮したいと願ひ、

ではどうして發揮するか。言うまでもない。自分が出るのは美文であり詩である。もし出来るなら美文の力によって美妙の最も純粹な靈魂の確信に基づく大信仰を發揮したいと願う。

されど美妙、只だ夫れ美妙と称す。其のうちに真理も善徳もふくむ。

と、美文・詩を書くことによつて美妙を發揮したいと願っている。

自分は流れではない。たとえて云うと深淵でなければ

ならない。そして清い泉を受ける。只だの溝であつてはならない。これを受けてたゞえ、楽しみ、これで生きていかねばならない。たゞえて淵とする。そうして自分が存在すると同時に、人の為めの泉源でなることが出来る。自分から尽きない泉が流れ出さねばならない。

と、美妙をたゞえて人の為めにそれを尽きることなく發揮したいと考えて、

余は美妙に帰依す。されど言はんと欲す。美妙は若し美術として發揮せらるゝ時に於ては將に宗教的なるべし。と更に換言すれば、決して肉体に非ず若しくは慰樂的に止らずして將に靈魂の生命となるべし。最高道念を鼓吹し来るものならざるべからずと。と、美妙の価値を理念的に述べている。

七日の記

昨日中桐確太郎氏に一書を裁す。

と、ある。その手紙は

中桐君足下

君其後御変りなき事と存候小生不相変壯健且つ幸福

平和なり幸に御休念被下度候

と、書き出して、君は近頃悩み苦しんでいると聞いたがどうか。自分は君の煩悶が和らぐよう神に祈っている。

自分は以前と同じように毎日瞑想し感想しつつあって欺かざるの記も三冊を終って四冊目にかゝった。近頃特に美真の神の存在を疑わず、絶高の男子なるものを考えてこれも神のものであると思っている。

そして次に

小生は已に此世に於て吾何を為す可きかを知り、吾れ何に住む可きかと知りたれば、只だ其れに向て進むのみに候。小生今や美妙でふものに感暝するを得るに至りたるが如く自ら覚へ、自から書して「嗚呼美妙ノ余は爾の宗教を信ずる也」と認め申候。小生今や自由なり。幸福なり平和なり。而して慨然として為すあらんことを欲するの猛氣日に益々昂る。

と、最近の心境を報せ、

それなのに友だちの様子を見ると痛恨に堪えない。われわれの眼前には救わねばならない世が控え、救わねばならない民がいるのに薄志弱行で自分のことのみ考え、頑迷なものどもがこの国民を蹂躪するにまかせている。

自分はこれを考えて躍起している。このことを大久保に

云つても知らぬ顔だし、頼みとする貴兄は煩悶に苦しんでいる。

と、慨嘆している。

次に

品性の美なるより美なるはなく、品性の美は「美妙」の感化によりて自然に養はれたるものより美なるはあらず。

と、品性の美は美妙の感化によって自然に養われていくものであると述べて、

悠々として起こる音楽を聞いて、俗塵を洗う思いをしないものがあるうか、完全な小説や詩歌を読んで靈魂を鼓舞されないものがあるうか。「美妙」は人の品性を美しくする。品性の美は、凡ての美の中で最も美しいものである。

自分は最高の品性を持つ女性を想像する時は恋愛より敬する心より、一種云われぬような靈想で満され、人間不死の信と、美真善の神の存在をいなむことの出来ない直覚をする。また絶高の品性をもつ男子を考えると、神そのものを感じないではいられない。

嗚呼品性高き人よ。美妙の粹なる哉。

余は唯だ「美妙」の感念を養はんことをつとむれば
足れり。

と、希い

最高の品性の所有者は、その外形はとも角として、その心底の最も真髓なところで、確信と安静がなければならぬ。カーライルの云うところのシンセリテイの人でなければならぬ。

神を信ずると云っても必ずしも美妙を心から感銘して信じるものでない。

だから頑冥で下劣な信徒もいる。

美妙を感じないものは断じて品性の高尚を望むことは出来ない。

人間を見るならたゞその品性を見よ。

美しい品性の人ほど幸福な人はない。

音楽が最も人間の品性を高めると信じる。

しかし、美妙最高の品性ある人物を描き出した文学が最高である。

詩人は最高品性の権化である。

と、品性について論じてある。

八日の記にははじめに

薄弱なる程、醜劣なる品性はなく、剛毅なる程、高美なる品性はなし。

と、剛毅の精神の高揚を叫んでいる。

昨夜は薬師寺育造氏宅で祈祷会があった。これは特に氏の妹がこの度、再び広島県の女学校に留学するのでその離別のために開いたのである。独歩は女子教育について感話している。

今日は日曜日。教会に出席。今夜は品性のことについて感話した。

今日午後教会の諸君が遊びにくる。色々と雑談をした後一しょに招魂場に散歩した。落花しつゝあった。

今は凡ての花が悉く咲き出たようである。春は今日の頃が絶頂である。

市山正氏から来状。

新聞紙は金玉均横死のことで一ぱいである。

自殺者がある。炭坑のガス爆発のため横死者がある。災厄だらけである。

あゝ惨たんたることが世にあふれている。

そして更らに吾国の形勢を見ると、政界に教育界に、

そもそもまた文学界に慨嘆すべきことばかりで一ぱいである。

嗚呼男子豈に一日も安閑として日を暮す時ならんやと、悲憤慷慨している。

この前日の七日の尾間日記を見ると、

午後一時、飯沼と田中と一しょに国木田先生を訪問した。この日集まったのは富永・山口・長田を加えて六人であった。色々話をしたが、先生は「佐伯の青年は歎びや苦しみを共にし、このように集まれば互に打ちつけて談笑する。これはこの土地の習慣か、或は土地が狭いためか。東京などでは心の中にたまったものを思い切り話すこともなく、何か奥歯にものがはさかっているように打ち解けない場合が多い。我々基督教徒はこんなことを打破して真に愉快に打ち解けた交際をもちたいものである」と話された。

それから二時間半ばかり話し合つて招魂場へ散歩した。また、夜の教会での先生の感話は

「凡て世の中の花であれ、草であれ、山であれ、水であれ、みんな美しくないものはない。しかしこんなもの

の美しさより、なお一層人の品性の聖いものほど美しいものはない」と、話された。自分はこの話に強く感動した。

と、ある。

そして次に

余は只だ詩人ならば足れり。余が天職は美妙を以て人心を洗ひ、其の帰趨をまし得は足れり。

と、自分の最大の希望である詩人となつて、世の人々の心を洗ひその趣くことを示し得たら充分である。と述べて、

沙翁は大詩人である。しかし世の中は依然としてこのようである。ウォーズウオースは救世の望みをもつて歌つた。しかし世の中はこうである。

しかし、多少は世の人を救つた。

嗚呼一人の「吾」を救ふを得ば以て真の教師たり。

詩人たる可し。

と、自分の希望を示している。

九日

自からの信仰の火に燃ゆる時は兎も角として、自分を

客観してこの「吾」を思うと、無限の悲哀を感じずには
いられない。

このはてしない悠々とした天地の中であって、ごたご
たと紛糾して、束の間の恩愛や情慾にあこがれて生滅し
ていくこの浮世の無数の「吾」、これが本当のこの世の
真相ではないか。哲人の心になって生活すればとも角、
この世の人々の運命はこれではないか。

ではどんな心か「人間の生活」は

あらゆる小説や物語や歴史が示しているところは何か
たゞ生滅のあとと幻影のしるしではないか。

あゝ人間とはこの天地に対して何者か、盲目な意志の
はてしない働きの偶然な結果から生じたものか。

冷たい理性はこのように問う。

しかし心の中にある熱い情はいつものように云う。

いや、いや、信じよ。人は神の愛の大法則のもとにあ
る。宇宙は極まるところのない進化のうちにある。信じ
よ、たゞ信じよ、そうであれば人間は楽しいだろう。と
幸福・満足・これは人が指さすところか。

もし一度び足を信仰希望幸福満足の立場からはずして
眼を客観悲観漠々無限の光り無い絶望の底ない谷に注ぐ

と、実に形容する言葉もない戦慄が魂にゆきわたる。

人とはたゞ幻影の異名であろう。秀吉はどこにあるか
この幻影は消えた。しかし「吾」は存在する。

吾とはたゞ「美妙」の力に感応して極まりない幸福と
希望とに感銘し得て、理性をもって信仰に立ち帰らさせ
るものことである。

嗚呼美妙ノ吾如何にしても爾の宗教を信ぜざるを得
ざる也。「吾」を絶望より煩惱より救ふものは爾なり
と、人間の宿命とも言うべき絶望煩惱から救うものは美
妙である。これに感応して希望をもち幸福を得て、理性
をもって信仰に立ち帰るべきである。と、美妙の力を信
じている。

次

外より言へば美妙。内より言へば情。これぞ人の命
なれ。これ此悠々たる天地の心なれ。真理はこれのみ
と、美妙・情が人の命であり、天地の心である。と説い
ている。

ウオーズウオースは言った。

人間の心に感謝す。これによりて吾等は生く。

感謝す。其溫和・其喜び・其をそれ。

と、またエマソンは言った。

諸々の思想は獄屋なり、諸々の天は獄屋なり。故に吾人は詩人を愛す。即ち創造者を愛す。其の人は或は短歌に於て或は行為に於て、或は風采に於て、品行に於て吾に新鮮なる思想を与ふる也。彼は吾人の鉄鎖を絶つ、吾人を放て新世界に入らしむ。

と、そしてまたシヨウペンハウエルが論じた言葉を聞け。

蓋し美術家は箇物をもて普遍を表す。即ち単純なる箇物によりて所詮科学の達し得ざる大宇宙の生命を示す。いかばかり分解推理すとも徹底しがたき美術的想念てふ財なり。天才の自然に対し、凡人の美術に対するや、心恍惚として浮世の苦樂を忘れ無限歎樂の別天地に遊ぶ。

と、ある。

人の心に感謝するのは情に感謝するのである。詩人が賞賛するのはこの情を賞賛するのである。美術を救世主のように云うのも情をあげるのである。人間にあって最も玄で真で美なるものはたゞ情のみであつて、宇宙の心も結局これに外ならない。内より言えば情外より言えば美妙である。自分はたゞこれを信じる。

どんな悪人であれ連れて来い。彼のうちには必ず美妙を感じる情が幾分か流れている。悪人にもなお心がある人と人が認めるわけである。

大哲人から凡俗の人に至るまで、彼の命はたゞ美妙に感応する彼等の奥底にある情のみである。

人心を信じ、人性を信じ、神を信じるといふ。みなこれは人間の美妙感を信じると云うのに外ならない。

美妙感とは或人には神を認めさせ、またある人には絶望のうちに言うに云われない慰めを感じさせて、宇宙のどこかに真理があることを直覚させ、また或者には我慾の心を転じて博愛の情に達さしめる。

と、美妙と情とを説き、自分の立場を

余は外より言へば宇宙の美妙のリアリティを信じ、内より言へば人間自然の美妙感則ち情を信ず。余は之に由りて宇宙そのものを信じ希望と満足とを以て生活せんとする也。

と、希望している。そして最後に

凡ての吾、この地上に生活すべく運命づけられた凡ての「吾」を救うのは、たゞ彼らが美妙感を信じさせることである。

と、結んである。

十日の記には

徳富氏の返書来る。其全文を左に録し置く。

と、書いて手紙の全文を記してある。

貴書拝見貴君は小生ヲ斯程ニモ金満家ナリと思ふや
小生は貴兄の志を諒セザルニアラズ併し右様の金策は
今日ニ於て出来兼候也貴兄若し小生の地位ニナリテ一
考セは思半ハニ過ギン幸に諒セヨ

小生は右印刷業云々ニ就て尚ほ学兄か一考ヲ煩ハス
蓋シ実業ハ空想ト両立セズ而して空想は青年の耽る処
貴兄の計企小生敢て悉々空想ナリト云ハズ然れども空
想の分子その中になからんや貴兄とは面交ニアラズ心
交也故ニ敢て腹心を布く

四月六日

早々不一

猪一郎

これが猪一郎氏が五百円借用の依頼に答えた手紙であ
る。

この返事を買ったといつても自分は望を失わない。印
刷業がいよいよ志の如く成功しなくても失望しない。自

分の流れの流れることに変りない。岩があればその上を
越す。その横をめぐかして流れ進まねばやまない。自分
の望はたゞ詩人として独立の生活を得ることが出来れば
満足する。勿論平和で閑静な生活を願う。しかし志望の
ため職分のため、真の幸福のため、信仰のためには苦難
をも避けることは出来ないであろう。唯だ至難の境に陥
るような愚はしないよう務めるのみである。

閑静な田舎の生活。一軒の家屋、数畝の田圃、普通の
くらしに差しつかえないだけの収入、倦まず著作する。
まじめで温厚な妻、これが時々描く夢想である。

うつ勃として起る愛国の念、堂々たる戦士の気概、こ
れがまた心に起る壮心で、これがためには一身の幸福を
なげうとうと思つている。

しかし、要するに凡ては神の手中にある。自分はたゞ
普遍の美妙感の発達を希つているのみである。自分のう
ちには確かに或最高絶高の信念と直覚と感情とが発達し
つゝある。ただこれを愛育するのみである。

このように印刷業開設の計画は、徳富氏に頼んだ五百
円の借用が断われたために資金のめどがつかず頓挫し
た。しかし負け嫌いな独歩は失望しないで、自分の理想

を述べ、将来詩人として身を立てると誓っている。

今日また友人（金子馬治）が早稲田文学に記載したシヨウペンハウエルの伝を読み了った。

自分は只だ信じる。宇宙は情の活動であって、宇宙の料は情の料である。人間もまた情によって生きる。この情と宇宙の情とが相ふれ合うところに美妙の感が起こる。凡ての詩歌的信仰、哲学的信仰、また純粹の宗教もみなこゝに起こるのである。信仰とは有限の世界から逸脱して無窮の希望と安心とに入るものである。そして人を導いてこゝに至らしめるものは実にたゞ情のみである。宇宙の料はまた情であるからである。

と、情の尊さについて記してある。

普通の人々と言っても多くはそれぞれの美妙感のうちに住んでいて知らないのである。見よ、農夫の生活を、彼らはたゞ利慾のためだけに生きているのであろうか。彼らとて情がある。自分と放歌する朗々とした音調の美妙のうちに、或は子供が膝にもたれる時、心の底からわき出る同情の念の美妙のうちに、また或は隣人の品性の美に接した時など、その他さまざまの点に於て能く美妙感の自然な感化や融和を受けつゝ満足を得ているのであ

る。

美妙感の有難さを記してある。

この十日の富永日記を見ると、

中島先生は予が前に於て国木田を多少褒貶せり。後に聞けば予が至らざる先非常に罵言危懼せり。と。而して現生徒を呼んで軟骨漢となせりと。予は激しぬ。予は甚しく国木田を庇ふの念益々切になり、直ちに尾間と共に日置を訪ひしも寝たる後なりき。帰りて鶴谷学館紛紜の顛末因縁を書き中根に送る準備をなしぬと、ある。また同日の尾間日記を見ると、

今夜出校中、退学に就き中島先生より題を出し種々弁難す。然し中島先生は唯是野心のあるありて云々と云ふのみなれど、同先生の話によれば吾人が有志家として仰ぐの日置氏の如きは、或は仲裁の爲にもせよ国木田の信実なる淡泊なる教師を過激とし短氣として持余し居るに因り、中島君に折衷呉様申たりと。又毛利公も石丸敏一の退学は御承知に候へ共其他の学生が退学は知らざるものなりと。若し毛利公に国木田の短氣なる過激なるを云へば、矢野様に濟まず、然ればとて生徒の退学を告げざるべからざるの訳なれば退校願方

を返戻したきものなりと。中島君に御托したりと。而して我等及国木田教師に向ては、彼の出校せざる生徒は最早打捨置くべしとの事なりし。此等に依り考ふれば、日置泉其人は如何なる人物ぞや。彼は勇氣なきか彼は人の不足を補ふ為め忠告するの愛はなきや。彼は只毛利公の御氣に入りたらんことを求めて、實際の有様を報告する能はざるか。其人又憐むべきものならずや。又中島曰く苟も感慨ある石丸敏一等は退学すれども軟骨漢は出校するならめと。石丸敏一果して感慨ありしや如何に、余は彼が凡ての行に於て主義なきが如く又感慨なきを信するなり。彼実に感慨なし、只僅かの学識弁舌を以て先輩を楯に取らんと欲す。又可憐可笑哉。かかる軟骨なる批評を受けたる我等は果して如何になすべき。只我等は此誤考を打破り我等が正義にして決して軟骨に非る事を顕すべきなり。尚佐伯青年の為に尽さんとして却て冷笑せらるゝ国木田教師の心想を思ひ我等は共に我等の正義なる国木田師の信実を以て人を教へ過激に非ざるを顕すべきなり。今夜中島教師より聞き、日置泉氏に質さん為宅に至りしも既に寝たり、依て帰宅す。

と、ある。勧告書事件は日益しに悪化して退学願を出す生徒が出る騒ぎとなり、独歩はいよいよ窮地に迫り込まれた。この二人の日記から推察すると、中島教師が反対派と蔭から糸を引いて独歩の排斥を企てゝいるらしい

十一日

哲学者がわれわれに教えるように、われわれはこの宇宙の実体について何ごとも知らない。われわれはたゞ時間と場所と制限のうちにあられる外皮だけを指して自然界としているのみである。

よく考えよ。場所と時間との制限の支配から脱して飄々と無限の境に遊ばしてくれるものは情ではないか。

宇宙の実体であるとわれわれの情は感じる。情が情に通うのである。

哲人はよく「知らず」と云つて満足している。彼らは確かに情によって感じ得ているのである。

つづく